

大阪市大地理と私の地理歴35年 藤本征治 人

暗い田舎道をとぼとぼ歩いていると、どこか祭りの遠い太鼓の音がかすかに耳元をかすめる。地理学を志してからの来し方を振り返ると、昭和41年秋の砺波散村の一シーンが目につく。それは、筆者が初めて経験したフィールドワークでのことであった。

サラリーマン生活に見切りをつけ、今一度勉強しようと決心した筆者は、山登りをしていたこともあって、自然と人間が交わる領域で勉強したいと考えた。そこで、山岳部の顧問をしておられた故村松繁樹先生を研究室に訪ねた。昭和40年の初夏のことである。不躰な若者の突然の希望に耳を傾けられた先生は、これを勉強してみなさいと言って一冊のフランスの地理教科書を与えられた（それは筆者のフランス地理学との出会いであった）。先生の勧めもあって大学院の試験を受け、無事に大阪市大地理の一員に加えていただけることになった。しかし、フランス文学出身の筆者にとって本格的な地理の勉強は初めてのことであったからというので、先生の勧めもあって学部の授業も同時に受けることになった。その一つに地理実習があったことから、件の砺波散村調査に参加することになったわけである。

実習調査は、福野町の、確か善証寺というお寺を宿舎にして、いくつかの班に分かれてそれぞれ課題を決めて実地調査するというものであったと記憶している。この調査には杉本尚次大先輩も参加された（ただし、風邪をひいて途中で帰阪された）。また、新藤正夫氏や北林吉弘氏といった富山地理学会の錚々たるメンバーもやってこられて、村松先生を囲んで夜遅くまで散村談義から地理学の在り方にまで話が及ぶのを、端で神妙に聴いていたものだ。この時の砺波散村実習調査の発表は、当時は古いモルタル造りであった浪速会館の畳敷きの薄汚い広間であったように記憶している。

この実習調査に触発されて、修士論文は、砺波散村をフィールドにして、「散居集落社会の変容—鷹栖を事例として—」というタイトルで纏めた。自分としては、あまり出来の良い論文とは思えなかったが、その一部は、故宮井隆先輩との共同執筆の形で、「圃場整備に至る鷹栖の変容—その後の砺波散村—」として纏め、村松先生の退官記念に編まれた『日本の村落と都市』（ミネルヴァ書房、1969）に載せていただいた。この論文の締め括りの部分で散居制の動向について触れておいた。というのは、かねて村松先生から圃場整備に伴う集村化の可能性の有無について訊ねられた際に、その時点では散居制維持の方向にあり、農地の所有・利用の様式が変わらない限り集村化の可能性は低いとお答えしたことがあったので、そのことを改めて論じておく必要があったからである。その後の散村の動向を追っても、その答えに間違いはなかったと考えている。

砺波散村については、大阪市大には村松繁樹：「礪波平野の散村三論」（人文研究 4-3, 1953）を始めとして、水津一郎：「土地占拠からみた散居の機能」（人文研究 5-9, 1954）、川喜田二郎：



「農家人口の変化過程」(人文研究, 5-9, 1954)、渡辺久雄:「地域に関する研究ノート」(人文研究, 6-12, 1955)、岩田慶治:「彌波文化の地域的秩序—ひとつの仮説的試み—」(人文研究, 7-9, 1956)など、大先輩の数々の優れた研究業績が蓄積されていた。集落の社会的側面に興味を持っていた筆者は、中でも水津先生や岩田先生の論文に触発された。水津先生が著された『社会地理学の基本問題』(1964)は何度も読み返したものだ。ただし、同じような考え方・方法でやっているのは新味がないので、自分らしさを出そうとしてフランス地理学(特に、ドゥ・ラ・プラーシュやソール)を勉強し、社会的な面をより深く追究することにした。そうした勉強の成果を、「散居村における社会構造の地理学的研究」(人文地理, 21-6, 1969)や「社会」の地理学的研究の系譜—フランスの場合—(『東西文化史論叢』, 1973)として纏めた。前者では、散居村における村落共同体的性格の弱体性を指摘した。しかし、この弱体性の指摘はもっともとしても、そのことを強調しすぎて、この地域を日本の村落がもつ共同体的性格の域外に置くようなことがあってはいけなことはないというまでもない。その後も、砺波地方を取り上げて、居住様式の変化、マチ・ムラ(都市・農村)地域の空間構造、水利の空間構造とその社会的性格、神社の広域祭祀圏など、社会地理的あるいは歴史地理的な研究を積み重ねることができた。経済地理がご専門の春日茂男先生には、当時は目新しくクリスタラーの理論を英語の原書で講じられたので四苦八苦した記憶がある。しかし、そのお陰で人文地理の講義ではクリスタラー理論の梗概を講じることができる。その当時の講義ノートは今も手許に残っている。当時、助手をされていた中村泰三先生には直接教わることはなかったが、私たちにとっては兄のような存在であり、新婚ほやほやの文の里のご新居を古閑紀秋さんらとお邪魔したことが思い起こされる。

昭和44年、関西大学に助手として就任してしばらくしてから、大阪市大を定年退職された藪内芳彦先生を関西大学にお迎えすることになった。先生には院生当時からオセアニア地誌の講義などを通してその警咳に親しく接し、尊敬してきただけに、嬉しかった。1977年に、先生が先鞭をつけられたトレス海峡諸島調査(1977年の第二次調査の代表は大島襄二先生)に加えていただいたうえ、海外調査の手ほどきまでしていただけたのは、たいへんありがたかった。おかげで、その後20有余年にわたって、そして今も、オセアニア地域の研究に携わり、多くの仕事をする事ができた。このトレス海峡諸島調査では、杉本尚次先輩や松本博之さんと御一緒することができた。その他にも、箕面市史の執筆に当たっては、先輩の故宮井隆さん、井上寛和さん、白石太良さんと一緒に仕事ができ、大阪市大に非常勤で行っていた頃の院生で、授業の後よく喫茶店で話しあった神前進一さんには、お勤めの大阪外大に、近所の誼で(?)非常勤講師として時どき招いて頂いている。

このように振り返ってみると、大阪市大で学んだ縁で、多くの先生方から教えるを受けることができたし、たくさんの先輩や後輩とさまざまな形で交わることができたことが痛感される。ただ、大学院から地理専攻に入った筆者には同輩がいないのが、なにより残念なことである。

大阪市大50年の歴史を十年ごとに区切ってみた場合には、筆者は第二世代の後半に属することになる。そういう意味では、大阪市大地理の基層部分の直ぐ上の層に根を張ることになる。その良き部分は大切にしたいと思うが、一方でそうした古さに依拠することはあってはならないとも考えている。ともあれ、大阪市大地理で学んだことが自分にとって大きな糧となっている。また、こうして創設50周年をとともに祝えることに感謝している。